

ドラムサークルは、参加者が輪になって打楽器を即興で演奏する音楽レクリエーションです。「リズムを合わせる」行為を通じて様々な教育的効果が期待でき、チームビルディングや社内研修、地域コミュニティづくりなどにも活用されています。

ドラムサークル授業

@川上中学校

川上中学校音楽堂にて、ドラムサークルの授業が行われました。輪になった席には大小さまざまな打楽器がセットされていて、入室した生徒は楽しく迷いながら好きな楽器を選んで着席しました。

好きなものを選んでいいの？

あれがいいなあ

ドキドキ

いろんな楽器がある！

こんなの初めて



ここをたたくといい音が出るよ



輪の中心にはファシリテーターの鳥川仁美さん。楽器の扱い方を簡単に説明し、あとは自由に好きな音を出して楽しもう！と導いてくださり演奏スタート。鳥川さんのジェスチャーに合わせて、各々が感じたリズム・音量・スピードで打楽器を打ちます。初めは戸惑いながらも、鳥川さんと周りとのセッションにどんどん心が開放されていき、5分もしないうちにみんなの表情が一気に明るくなりました。

自由にたたく！



好きな音を出そう！

下手とか失敗とかはないからねー



ドラムサークルにゴールはない！



そうなると打楽器の音圧もどんどん高まります。取材した3年生は、鳥川さんが少し難題なフリを出しても見事に音で返して、お互いに気持ちを高め合いながら音色を響かせていました。

歌ってもいいよー



白田先生のパイプオルガン演奏に合わせて、トーンチャイムで「翼をください」を合奏。とても素敵なハーモニーでした。

トーンチャイムの音色、気持ちいい！



鳥川さんの声

3年生の仲のよさ、お互いを尊重し合える優しさなどがセッションに現れていました。また、純粋で賢い人間性が活かされていて何を振っても返してくれるみなさんと一緒にセッションができて、気持ちよく楽しめました。



もう一度

知ろう、踊ろう 川上小唄

川上小唄

作詞 吉澤 善教
作曲 大村 能章

一、アア なんで白樺 おしろいつけた
今宵 夜霧が会いに来る

※アチャミロ ソウズラ マッタク ソウズラ

二、アア 千曲川原の 宵待草が
夜の化粧の水鏡

※(くりかえし)

三、アア 花は咲いたか 蝶々は来たか
蝶の浮気が そばとなる

※(くりかえし)

四、アア 花のつぼみを摘まれたために
でかくなるすら いもの種

※(くりかえし)

五、アア 客の顔見て はりこしまんじゅう
馬も顔出す いろいろ端

※(くりかえし)

六、アア 山の名でさえ 男に女
赤い顔した 山もある

※(くりかえし)

七、アア 峰のしゃくなげ 宿したつゆが
つゆが流れて 千曲川

※(くりかえし)



しゃくなげの花



赤面山



はりこしまんじゅう



駅前の歌碑。隣には二宮金次郎像も。



川上小唄は昭和23年ごろ、青年団か何か村の団体が歌詞を公募して作られたそうです。見事選出されたのは、御所平の吉澤善教さんの詞でした。川上村の自然や風景、名産品、暮らしが織り込まれ、小粋でロマンティックでもあり、詩情豊かです。善教さんは川上村農協(現JA長野八ヶ岳川上支所)の組合長を長年務めた方で、詩や俳句、短歌を数多く創作されたそうです。

そのころの川上村には俳句や短歌をよむ人が多かったようで、公民館報縮刷版の最初のころの「文芸欄」には村人がよんだ俳句が掲載されています。歌人の佐佐木信綱は昭和16年に川上村を訪れ、「千くまあがた川上郷は川原も山たかはらも月見ぐさの国」とよんでいま

す。この歌碑は信濃川上駅前にあります。この月見ぐさは川上小唄の中の宵待草(おそらくオオマツヨイグサで、月見草とも呼ばれる)ではないかと考えます。

当時の川上村は米がよく育たない寒村で、そばやじゃがいもは貴重な食料でした。じゃがいもは家畜の餌にもなりました。車が普及するまで運搬を担ったのは馬で、農家はいろりのある台所が土間を挟んで馬屋と向かい合う造りでした。そんな歴史も伝える川上小唄。今も小学校の運動会で踊られます。「わたしが小学生だったときと踊り方が違う」という方がいらっしやいました。が、今の振付がオリジナルに忠実です。来年は、皆さんも踊りの輪に入ってみてはいかがでしょう？

パイプオルガンの時報

9月から、10時と15時の時報が変わったのはお気づきですか？ 優しい音色で流れるのは、川上中学校のパイプオルガンで演奏された曲なんです！ 演奏している高見澤り力さんにお話を伺いました。

り力さんのことば

春ごろに役場から「時報音響をパイプオルガン演奏にしたい」と相談がありました。季節を感じる曲を選び、決められた秒数内に編曲するまで、時間はかかりましたが、やりがいがありました。ただ、自分がイメージした音と放送で聞こえる音のギャップが大きいなど、課題も多いと感じています。

農繁期の畑にオルガンの音が広がって、少しでも皆さんの癒やしになればと思って弾きました！ これから曲数を増やしていき、「川上村の音色」として定着できるように工夫したいと思っています。

実際に音を奏でられるパイプオルガンの存在は、全国的に見ても貴重で、その素晴らしさを知ってもらいたいと願っていた高見澤さん。思いはきっと伝わります。

